

# ゾンバルトの「資本主義」論

石 瀬 秀 治 訳

この譯訳は、Alfred Vierkandt によつて編輯された Handwörterbuch der Soziologie, 1931, Zweite Lieferung, SS.258—277 である。Werner Sombart の論文「Kapitalismus」を数年前に部分的に抄訳しておいたものに今度更に手を加えて全訳したものである。然しここではいろいろ都合で、特に与えられている紙数の制限と私自身の専攻する社会学という関心のために、何つかの部分を省略し、従つて全体の約半分をも省略するという結果にならざるを得なかつた。省略した部分についてはその箇所を明記しておいた。資本主義の問題は今日我々に否応なしに対決を迫る問題となつてゐるが、我々はゾンバルトの資本主義に関するこうした小論文からも、彼の主著からと共に、尚矢張り学びとるべきものを見出すであらう。

## 内 容

### 一、経済組織としての資本主義

#### 1、経済的志向

##### a、営利の原理

##### b、個人主義

##### c、経済的合理主義

#### 2、資本主義的経済組織の形態（この部分省略）

#### 3、資本主義の技術（この部分省略）

### 二、資本主義によつて作られた人間共同生活の諸形態

#### 1、資本主義的企業（一部省略）

#### 2、企業の聯合（この部分省略）

#### 3、経済生活の即物化

石瀬訳・ゾンバルトの「資本主義」論

- a、資本主義精神の即物化
  - b、市場現象の即物化（一部省略）
  - c、経営の即物化（一部省略）
- ### 三、資本主義社会の構造
- 1、消費者
  - 2、企業家階級
  - 3、賃労働者階級

## 一、経済組織としての資本主義

我々は、資本主義とは、次に述べるようないろいろの特徴を示すところの、一定の性質をもつた経済組織であると考える。

1、即ちその主観的精神や経済的志向 Wirtschaftsgesinnung は次のように規定される。

a、その支配的経済原理は営利の原理 Erwerbsprinzip である。資本主義の枠のなかでの凡ての経済活動の目的は利潤 Gewinn であり、しかも貨幣利潤なのであり、従つて現存の貨幣総額の増大ということである。こうした利潤の観念は、資本主義以前の凡ての経済組織、特に封建的手工業的な経済を支配していたところの、生計 Nahrung の観念に対立するものである。

資本主義以前の経済組織においては諸々の経済的関心の中心に存在してい

るものは人間なのである。そしてこれがその他の凡ゆる思惟や行動を規定している支配的な観念なのである。財の生産者、あるいは財の消費者としての人間が、いろいろの関心をもつて、各人や社会の挙動を規定し、また経済過程の外的秩序や職業生活の形成をも実際に規定しているのである。諸々の経済過程の規制を目ざすところの、社会や各人の規範の設定は凡て人間的、*human* にきめられる。経営に關与せる凡ゆる者の基調は人間的な色づけをおびる。諸々の財貨は消費者たちがいろいろの使用財の需要を良くまた豊かに満たすことが出来るように、然しまた生産者と商人たちも良きまた豊かな生計を立て得るように、生産され取引される。両者は必然の結果として生計を可能ならしめると共に、慣習をも生ぜしめるのである。だから、人は質的に規定された使用価値という範疇が評價の中心点に立っているとすることも出来るであろう。

それに対して、営利という観念の支配するところでは——これが重要な点であるが——凡ゆる経済行為の目的は生きた人間に關係するのではなくして、寧ろある抽象体が進動している。つまり、資産 *Sachvermögen* が経済の中心点に立っていて、その増殖、従つて利潤の獲得が凡ゆる経済活動の出発点であり、また終極目標なのである。人はこれをまた次のように言い現わすことも出来るであろう。即ち、われわれの経済組織の純粋な観念は生産の基礎として役立っている交換価値の貯蓄（資本）を利用するという努力において現われるのである。

営利の観念のうちには経済的方向の次のような発展の諸形式が含まれている。

イ、先ず第一にみられるものは無制限の営利 *der schrankenlose Erwerb* である。営利にはいかなる限界もなく、その努力には際限がない。こうした無制限性はだから消極的と積極的との二重の意味をもっている。

先ず消極的な意味を見よう。資本主義的企業の目的は資産の利用にあるが、このことは資本主義的経済行為の諸目的が経済対象の現実的な個人的性格から分離することを意味する。その無際限性はその目的の抽象性に基

づいている。資本主義關係のうちに現われる活動に方向を与えるものは最早決して個人や多数の人間の量的と質的に安定するように限定された需要ではない。利潤全体は、どんなに増しても、それで充分だと言うことが出来る程までには決して高まることが出来ないのである。

然しながら無制限なる営利への傾向が積極的にこうした際限のない可能性のうちに作り出されるという事実に対して力をつくしているものは企業家連の心理的強制状態なのである。凡ゆる事業の増大は、質的に能率を高めることによつて、あるいはそうでない場合には少くとも量的に支配圏を拡大することによつて、企業家連に役立っているという事実は、屢々企業家の明白な希望に反して、経営範圍の絶えざる拡張に駆立てている。無限の遠方に押しやられた目標に向つての人間活動のこうした特異な關係のうちに資本主義的経済組織の動的な力が基礎づけられているのであつて、そうした動的な力がこうした経済様式の驚くべき業績を凡て明白ならしめるのである。

ロ、次に見られるものは無制約的営利 *der unbedingte Erwerb* である。質的な点において無制限であるところの営利は無制約的な営利となる。それは経済的な利害範圍のうちにある凡ゆる現象を拘束することで満足せず、人間文化の他の諸領域をも侵害して、価値界全体に対して企業利益の優位を宣言するという傾向を發展せしめる。営利が無制約的なものになる時には、凡てのものはただ、それが経済的利益に役立たしめられることが出来る限りにおいて、意味をもつように見え、人間は唯單なる労働力として、又自然も唯單なる生産手段として見做されることになり、人生全体は唯一つの大きな企業の展開というものになり、宇宙は唯一つの大きな工場であつて、そこに生活し活動する凡てのものは、丁度大きな元帳におけるように、その貨幣価値に従つて登録せられることになる。凡ての人格的に規定された理想が人間の価値評價から消失してしまひ、人間的幸福を目指す凡ての努力は隠退していく。唯僅かに企業機構の完成のみが努力するに価する目標として重要となり、純粋なる手段が絶対的な目的となる。最も廉価な価格、最も迅速な交通、最も高度の技術、最大の財産、そうした凡ての事柄が進歩という曖昧な

概念のうちに総括され、それが人間の努力の窮極目標として残されたものとなる。よし世界は滅ぶとも儲けあらんことを *Fiat quæstus et pereat mundus* ということになる。

へ、更に次に見られるものは仮借なき営利 *der rücksichtslose Erwerb* である。無制限にして無制約なる営利は遂には仮借なき営利に変わる。そしてそれが行為に対する変革された価値判断から実践的帰結を引出す。それは、営利の無制限にして無制約なる発展のための道が自由に開くようになるために、何らかの対立する関心にも仮借することなく、凡ゆる障碍を除去することになる。営利の努力の強度はここにおいて頂点に達し、道徳的な情緒的な性質をおびた凡ての抑制がなくなつて了う。営利の価値は、それに対しては如何なる他の価値も最早意義を失なつて了うといつたような、そうした独裁権に達している。若し手段の選択が唯僅かにそれが究極目的（即ち正しく無制約的な営利）に適しているという観念のもとにおいてのみ行われる場合には、行為者はその手段の選択において仮借なく *spruppelos* 振舞うと言える。實際営利に向けられている凡ゆるものごころした解放とそれ以外の凡ての起動力の拘束とは営利の努力のうちに心理的に内在している傾向を示すように思われる。

### b、個人主義 *der Individualismus*

ここでも矢張り競争の原理が問題となる。この原理は、個々の経済主体が専ら自身で独立しているように感ずるところの、精神的態度である。個々人は唯自己とその力のみを頼りにする。彼は、その意志と独裁権に順応する限りにおいて、経済生活に関係せる他の人々の不幸に顧慮することなく、その活動範囲を拡張していく。彼は仮借なく振舞う。その代り彼は他人に対しては原則的に自分に対する何らの顧慮をも期待しない。彼は何らの助力をも、援助をも、保護をも期待しない。ここで肘を自由に動かし得るわけほどのものを意味しているところの、（自然的な）自由の原理は、凡そ民主主義的な自作農や手工業や近代的社会主義の諸体系とは正反対に、平等の原理を

犠牲にして実現せられている。そしてこうした競争の原理に適合せるものが給付と反対給付という完全なる有償性の原理、即ち私は汝が与うるために与うという原理 *das du-ut-des-Prinzip* なのである。

c、資本主義的経済組織において勢力を有する第三の経済原理は経済的合理主義 *der ökonomische Rationalismus* であるが、これが特に諸々の資本主義的組織の凡てに行きわたつていている（こうした組織の外部においては非合理性をおびた広汎な領域にわたる経済生活が頼拠しているのであるが、科学的社会主义はそれを経済生活から完全に根絶するということを課題としているのである）。

経済的合理主義、換言すれば出来得る限りの合目的性に対する凡ゆる企図という原則的な立場は諸々の資本主義的な組織においては（a）経済管理の計画性、（b）狭義における合目的性、（c）合計算性あるいは可計算性という三重の仕方で見られている。

計画性 *Planmäßigkeit* は資本主義的経済組織のうちに広大な展望をもつた計画に従える経営をもたらし。これは個別経済にとつては充分理解せられているところであるが、後で述べるように、資本主義経済はそうした個別経済の上に組立てられているのである（社会主义はそれとは異つて更にこうした計画性を諸々の個別経済を全体として包括する普遍的なるものにしようにするのであるが、そのために社会主义は組織的には必然に一つの経済的な全体的計画から出発するのである）。

狭義における合目的性 *Zweckmäßigkeit* の原理とは凡ゆる個々の場合において正確な手段選択を追求するものである。

最後に合計算性 *Rechnungsmäßigkeit* の原理とは、それが（貨幣における）精密に数的な計算と凡ての経済的な個別現象の記録とそれの計算的総括を一つの意味をもつものとして秩序づけられた数の体系にまでまとめ上げるように努めることによつて、結局有償性の原理を経済的合理主義の原理と結合させることになるものである。合計算性の原理は資本主義的経済組織に特有の高度に発達せる簿記術に最も良く現われている。諸々の経済過程のこう

した計算による組織化を完全に遂行するためには、経済生活の凡ゆる個別的過程は貨幣表示によつて管理されねばならない。凡ゆる経済現象はそうすることによつてその質的色彩を失ひ、貨幣で表現することが出来、又表現されたる純粋量になるわけである。

そうした合理化は勿論企業的全範圍に關係を持つ。それを分析してみると、それは先ず第一に生産に影響を与える。合理化は生産面においては最も合理的な処理法を採用し、そうすることによつて科学的な原理に基づいて組立てられた技術の喚起者や振興者となる。それは合理的な経営組織、即ち経営区劃や経営配置を作り上げる。それは労働方法と労働状態を合理化し、その結果個々の労働力が資本主義的な究極目的に役立つように使用せられることになり、曾つてW・ジーマンスが警句的に述べたように（一八四七年五月三十一日の弟にあてた書簡）、「旧慣に取つて代つて精力的にして一面的な活動が現われる」のである。

生産過程の合理化と並んで第二に財貨販売の合理化が行われる。即ち、最も合目的な生産手段の供給が為され、又商品の合理的な売却が為されるが、これは市況の賢明な評価や最も有利な市場の探索によることもあれば、購買者に対する巧妙な影響（いろいろの新しい小売業の形成など）によることもある。

経済の合理化は第三に、経済と何らかの関連をもつていところの、諸々の益々広汎になる文化領域に及んでいく。素朴なものが田舎から消えてゆき、美術的個性的なるものも、邪魔になる場合には、廃除せられる。

資本主義の本質から現代の文化全体に入りこんでいる合目的性の観念は更に時のたつうちに人間や事物や生活過程一般の本質的合理主義的に合目的的な評価に導いてゆく。例えば工芸におけるいろいろの近代理想のように。現代の経済組織における凡ての個人的努力が最高の合理性に向けられているのに、他方資本主義経済組織を満たしていると思われる他の観念、即ち力の展開に対する自然的な努力に一致し、又経済過程の全体的調整を個々の経済主体の恣意に任ねるところの、営利の観念は経済組織を全体として

は非合理的なままにしているのである。こうした最高の合理性と最高の非合理性とが並存しているということのうちに資本主義的経済組織にのみ見られる沢山の危機状態が基礎をもっているのである。

## 2、資本主義的経済組織の形態（この部分省略）

### 3、資本主義に適應せる技術（この部分省略）

## 二、資本主義によつて作られた人間共同生活の諸形態

### 1、資本主義的企業

#### a、その概念

資本主義に適合して経済生活を進行せしめる経済形態は資本主義的企業である。その本質的特徴は営業の独立化ということである。即ち従つて個々の活動せる人間を超えて独立的な経済組織を高揚せしめることであり、一つの経営において相並んで又相次いで現われる営業上の諸々の事象を凡て一つの概念的な統一体に総括することであるが、然しその場合そうした統一体は自から個々の経済行為の担手として現われ、言わば個々人の生命よりも長く生き続ける独自の生命を営むのである。（以下若干省略）

資本主義的企業の本質的核心は営業の独立化ということによつて言い中てられる。そのことはそれによつて始めて資本主義的経済組織に固有の諸観念を實現せしめることの出来るような経済経営の形式が作られているという事実を明かにすれば直ちに理解できるであろう。

人間から分離せしめられたそうした営利の機構において始めて、資本主義的企業がそうであるように、営利の原理が妨げられない活動に達することが出来たのである。企業の独立化が始めて無制限なる利益への努力に対し自由なる路を開くのである。

然し営利の原理が資本主義的企業において始めて十分に發展せしめられることが出来るように、又凡ての経済事象の完全なる合理化という観念、即ち

合計画性と合目的性もこうした経営形式の枠のなかで始めて実現せられる。経済過程が営利の原理に引渡された後で、企業が独立の生命をもつものにまで作り上げられて始めて経済過程の不斷の持続が保証せられるのである。(以下若干省略)

## b、資本主義的企業の内容

資本主義の枠内における凡ての経済活動の目的は、上に述べたように、利潤の獲得である。だから、これが又凡ての資本主義的企業の目的でもある。資本主義的企業が利用している諸々の手段の特質はこうした目的の特質に適合している。即ち、資本主義的企業において發展せしめられた特に経済的な(即ち換金に向けられた)凡ての活動は結局貨幣価値上の給付と反対給付に関する契約締結 *Vertragschließung über geldwerte Leistungen und Gegenleistungen* ということになる。(以下若干省略)

資本主義的企業の枠内においては凡ての技術的問題は契約締結に帰せしめられねばならず、資本主義的企業の凡ゆる意味は唯それの有利な形成にのみ向けられている。一定時間の仕事で物財に対して、あるいは物財が物財に対して交換せられるとしても、その際に結局のところ資本主義的企業家の手のうちに彼の活動全体が獲得しようと努めているところの資産における例のプラスが後に残るといふ事実だけが何時も重要なのである。諸々の商品あるいは仕事の交付に関する契約の内容は凡て商品に対する一般的な等価物、即ち貨幣の形における交換価値の具体化に関しては凡ゆる質的差異を奪われて、唯僅かに量的のみ表象され、その結果今や勘定が数字上の借方と貸方において出来るようになる。元帳の借方と貸方が資本主義的企業のためにはある残高をもつて終るといふ事実を前に述べたが、資本主義組織において企てられる諸々の取引の成功の基礎は凡てこうした結果のうちに含まれている。資本主義的企業の本質的な内容は鉄の生産や人間あるいは財貨の運送や商品の販売や芝居の上演や信用の周旋などにあるのではなくして、その内容は勘定すること *Rechnen* なのである。

## c、資本主義的企業の諸形態 (この部分省略)

## 2、企業の聯合 (この部分省略)

## 3、経済生活の即物化 *die Versachlichung des Wirtschaftslebens*

現代文化全体の普遍的即物化の極めて本質的な一部分を形作っているこの過程は何よりも先ず資本主義によつて促進せられている。私は即物化あるいは豊かな心情を奪うこと *Entseelung* と同義の理知化 *Vergeistung* ということによつて個人的な生活表現あるいは人間間の個人的な関係を、人間を閉じ込めて今やその態度を限定するようになる、精神的形成物によつて取り代えるということの意味する。瞬間的に生み出される意のままの自由な発案は規則あるいは前堡の体系によつて取代えられて、人間はその決心と行為においてそれ等に隷従せしめられ、個々の精神的行為の過程が今や規制された強制的なものとなるに至る。

我々は即物化のこうした過程を、経済が資本主義に属するものである限りは、経済の凡ての領域において認めることが出来るが、特に (a) 資本主義精神の即物化と (b) 市場における諸現象の即物化と (c) 経営の即物化を区別することが出来る。こうした即物化は一部分は資本主義が作り上げ、我々が前述の箇所で見つけた企業聯合の特異な諸形態と密接に関連している。

## a、資本主義精神の即物化

これは資本主義的企業において、又それによつて生ずる。我々は、それを理解するためには、ただその特質をあるがままに意識しさえすればよい。

(イ) 資本主義的企業はその特有の諸目的を持つている。もつと正確に言えば、それは唯一の完全に規定された目的をもっている。或は更にこの場合もつと厳密な特色を引出そうとするならば、それは営利という唯一の完全に規定された目標を持つているということになる。資本主義的企業は、そうした

目標が唯それ丈で資本主義的企業の本質に有意義的に一致しているが故に、ただそうした一つの目標だけを持つことが出来るという理由で、そうした目標だけを持つてゐるのである。資本主義的企業の唯一の目標は利潤であると言う場合、それはただ分析命題であるにすぎない。何故なら資本主義的企業とは概念上利潤の獲得という目的のための設備に外ならないからである。ところで、こうした構成体において、これが重要なことなのであるが、資本主義経済の意味とその個々の経済主体が立てる目的が統一を得るのである。そうした諸々の目的の定立は、個別的に規定されるものであるが故に、その本質上任意的なものである。それ等のもとに資本主義経済に内在する固有の目的、即ち利潤への志向が——恐らく特別の程度と普及において——主観的動機、即ち営利への志向としても現われるのは偶然に外ならない。更にその他に、我々が資本主義的企業家の動機を見渡すならば、権力欲、名誉心、責任感、公益感、活動欲などのようないろいろ沢山のものを認めることが出来る。ところで然しこうした凡ての動機が資本主義的企業において作用を及ぼしている間に、それ等は内的必然性をもつて正に利潤への志向という最高目的に服従せしめられるに至る。何故なら、やや詳細に吟味してみると、資本家の行為を指導する諸々の動機のどれを取つてみても、資本主義的企業そのものがその活動において成功に飾られることなしには、効果ある作用をなす如何なる可能性をも持つていないことが判るからである。然しながら、こうした成功の実質は利潤、即ち生産費を上まわる剰余の獲得ということに外ならない。だから、たとい兎に角企業家がその他の場合に何を望もうとも、又彼の活動が主観的には如何なる目的に従つていようとも、彼は資本主義的企業家であるが故に、何時も成功、即ち利潤の獲得という資本主義的企業の有効な活動を意欲せねばならない。資本主義的企業家の主観的目的の資本主義的企業へのこうした陪臣化を私は利潤への志向の客体化 *die Objektivierung des Gewinnstrebens* と名づけてきたのであるが、そうすることによつて資本主義経済の意味と本質の解釈において従来みられたいろいろの曖昧を排除したことになると思う。(以下若干省略)

(ロ)我々が資本主義的企業と呼ぶ怪物は然しまた独自の意味をもつてゐる。何故ならそのうちには経済的合理主義が所有者と使用人という人格から完全に分離して宿つてゐるからである。この事は——不分明なものを剥ぎとつて言えば——次の事実、即ち経済的に合理的な——即ち企業の利潤産出に客観的に適合せる——諸々の営業方法が時がたつにつれて出来上る(唯経験を通して)——ということの意味する。ところで然し高度資本主義の時代になるとそうした営業方法の範囲が絶えず意識せられるようになり、それが更に本業や副業として営まれる、一部は営利的に、即ちそれ自身利潤の目的のために行われる活動によつて経済的合理主義の人為的な生産 *künstliche Erzeugung von ökonomischem Rationalismus* にまで意企的に拡張せられるようになるという特徴が見られるのである。即ち、計理士や会計士に関する経営学の教授からタイプライター、算盤、計算器、書簡整理箱、帳場備品のような種々の帳場必要品の製造業者にいたるまで、日々幾千もの人々が経済的合理主義を高めることが出来る手段と方法を見つけ出すために頭を悩ましているのである。(以下若干省略)

(ハ)資本主義的企業、即ちここに抽写したこの怪物は最後に然し又矢張りいろいろの徳性をもつてゐる。資本主義の初めにおいては企業家は、若し成功しようと思ふならば、自分自身の人格においてそうした市民的諸徳性について専心しなければならなかつたのであるが、然し今ではそれ等は企業の上に移されて、今日では企業家自身はそれ等とは全く無関係に對立している(即ち、企業家はそれ等を持つことも出来るが、然し持たなくても別に差支えないわけである)。現代の成功せる企業がまつてゐるそうした市民的諸徳性としては特に勤勉、儉約、堅実がある。

## b、市場、(イ)金融市場と資本市場における諸現象の即物化

凡ゆる以前の時代においては諸々の信用関係は人格的な特徴を担つてゐた。貨幣を余分に所有していた者は——今日でも友人間にみられるように——それを信用づくというような一定の条件で特別の協定に基づいて他の者

に貸したか、或は個人的な契約の内容がきめられていて、債務者を義務づけている債務証書の交付と引替に貸したのであつた。それは私人間の信用取引にも又商人間の信用取引にも通用した。(以下若干省略)

ところでこうした状態は資本主義によつて根本的に変えられるに至つてゐる。AとBとの間の個人的な債務関係の代りに未知の人と未知の人との間の非個人的な関係が現われているが、これは一部は特別の諸組織によつて、又一部は債務証書の新しい諸形態によつて生み出されている。こうした変化は(a)銀行原則、(b)証券原則、(c)手形による支払原則という三つの原則の適用によつて完成されたのである。次にこうした三原則の特徴を述べることにしよう。

(a) 銀行原則 (この部分省略)

(b) 証券原則 (この部分省略)

(c) 手形による支払原則 (この部分省略)

## (ロ) 労働市場における即物化

労働契約は種々の段階を経過してきた。手工業や封建的農業は強制的な労働関係を持つてゐる。強制的な労働関係においては労働者は個々の諸規範によつて作られている共同態の関係に入り、労働の諸条件は法や慣習や伝統によつて確立されていて、個人の身体的と精神的な幸福と同時に全体の存続を保証するような諸関係を作るように決定されている。契約者たちには凡ての合理的な合目的性に対する考慮は少しもない。経済的関心はまだ慣習的諸規範の組織のうちに深く埋もれているのである。

資本主義は労働契約の経済的内容を絶対化することによつてこうした組織を破壊した。労働契約は今や資本主義経済を維持するということのためにのみ役立つのであつて、そこに合理化への第一歩がみられる。労働契約は今や何よりも先ず凡ての個々の労働者が凡ての個々の企業家と自由考量によつて結ぶ「自由な」「個人的なる」ものである。

然し「自由な」労働契約も今ではそのままであるのではない。それも又即

石瀬訳・ゾンバルトの「資本主義」論

物化されて、最高度の合理性に達している。即物化された労働契約とは集団的な労働契約あるいは賃率契約 *der kollektive Arbeitsvertrag oder der Tarifvertrag* を言う。その本質は契約諸条件の形成によつて標準となるものが最早二人の契約者の任意的協定ではなくして、人々が一度で(一定の部門や場所や期間のために)確立して、その後凡ゆる個々の契約締結に際して規範として妥当するような協定であるということにある。この場合決定的に重要なことはこうした契約締結が最早心情から心情への直接的な交渉によつて行われるのではなくして、ある精神的形成物が介入することによつて成立するということである。(以下若干省略)

人は賃率表による個々人のこうした拘束性を資本主義以前の時代における労働契約にとつて存在していた拘束性と比較してみると考えるかも知れぬ。然しながらそうした類似性は全く外面的なものである。内面的にみるならば、職人と農奴の強制的な労働契約と賃率表による契約とは根本的に異なる。前者はその拘束性を共同態の關係に負い、超個人的な、究極的には経済外的な諸規範に基づくのに対し、後者は資本主義精神から生れ、利害の観点に支配された、純粹に合理的な目的をもつた形成物である。賃率表による契約は自由な労働契約として、就中それが諸々の労働協約に与える比較的大きな安定性とそれによつて保証される算定の確実性のために、資本主義的諸目的の要求に適合しているが故に、私はそれを比較的高度の資本主義的合理性であると呼んだのである。

## (ハ) 商品市場における即物化

商品市場における凡ての本源的な取引きは、売手と買手とが一緒に会合して、取引さるべき商品を前にしてその契約を結ぶという具合に行われる。財貨販売のこうした形態には種々の特色があるが、然し凡ては常に唯一つの特性を表現している。人はこうした性質の取引を一口取引、現物取引、同地取引、英語では現物取引 *spot business* と呼んでいる。私はその総括的な特徴を示すものとして「直接売買」*Handkauf* という適切なドイツ語を選んでい



(8)

るが、フランス語の *vente hors la main* という言い現わし方はそれに正しく良く一致している。この言葉は、我々が今ここでは、こうした性質の取引が示す、特殊性を凡て包含している、最も人間的事象、即ち手から手への取引や面接的な取引に関わり合っていることを意味する。

こうした直接売買は今や資本主義によつて遠隔売買 *Fernkauf* に改革されているのであるが、この遠隔売買の実質は、遠隔の土地にいる契約当事者たちが将来におけるある一口の遠隔の土地にある商品の引渡しについて取引を結ぶということにある。それ故に遠隔売買も供給取引として特徴づけられる。それが取引諸関係の即物化を意味することは明白であろう。(以下若干省略)

### c、経営の即物化

即物化ということは理知化あるいは豊かな心情を奪うということと同一であるが、この事実は経営現象において特に明白に現われている。資本主義的経営においては実際に又豊かな心情はあつてはならないのであつて、唯理知だけがあればよいのである。現代の経営は、それ自身純粹なる精神的形成物である、資本主義的企業に言わばびつたり合つた衣服でなければならぬ。比喩を使わないで言えば、現代の経営現象の意味内実は、経営において実現されている、資本主義的企業の観念への接近がそれにおいて完成せられるということにある。

然し我々が如何にしてこうした理知化の過程、あるいは心情の理知によるこうした代理が生ずるのかを問題にするならば、テイラーがそれについて曾つて——何らの予感なしに——「従前においては人格が第一の地位にあつたが、将来においては組織や体制が第一の地位に来るであろう」と述べた時に、正しい答を与えている。(私がそれを更に強調して言うならば)それは、諸々の人間関係に代つて諸々の「組織」が現われる、ということなのである。恰も漏斗のなかへ注ぎ込まれるように、経営の内部へ流し込まれるところの人間と事物とはそうした組織のなかに言わば落込んで、丁度一つの装置にお

けるように経路と開閉装置に従つて適当な場所に押しやられるのである。人間精神を沈澱せしめて、経営を作り上げる助けとなつている組織には三つのものがあるが、それ等は規範の組織(管理組織)と数の組織(会計組織)と器械の組織(機械組織、装置組織)である。勿論こうした三つの組織はただ観念上においてのみ別々に並存するのであつて、実際には噛み合つている。我々はその構成を追求して、出来る限りその本質について一層詳細な知識を得るように努めることにしよう。(以下若干省略)

### 三、資本主義社会の構造

我々は資本主義社会のうちに三つの人間集団を区別することが出来る。それ等は自然的には交叉し合つていながらも、然しそれでも時折特殊な関係において相互に明瞭に際立つた対照をなしているのであるが、それは消費者と資本家や企業家と賃労働者である。資本主義社会においては、「第三の人達」、即ち資本家集団にも賃労働者階級にも所属していないが、然しそれでもその消費者としての存在が資本主義の構成を規定している人々も生存している。我々は消費者集団においては一国の全人口を考慮せねばならず、又資本主義社会における需要形成一般が示す諸々の特殊性について展望を持たねばならない。其故我々は時折現今の社会秩序の経験的事実に手を伸ばして、厳密な意味における社会学的考察の限界を超えることを強要されるが、然しこのことは諸々の関係を理解するという点においては損害としてよりも寧ろ利益と感ぜられるであろう。

#### 1、消費者

高度資本主義の時期における(最高度の)消費者を特徴づけて、それをそれ以前の時代のものから区別するものは(a)それが主として中位の、又小さな所得をもつた人々であるということ、(b)それが主として都市人、しかも大都市の住民であるということ、(c)それがその需要の形成に際しては益々一層実業家——生産者と商人——に依存するようになっていくという



ことである。

資本主義に特有の生産諸条件と販売諸条件並びに時代の一般的な生活様式に結びついた消費者のこうした特質からして今や資本主義時代に特有の需要形成そのものが明かになるが、次にそれについて述べることにしよう。

1、こうした需要形成の第一の特徴ある傾向として現われているものは需要対象の比較的頻繁なる交替 *der häufigere Wechsel der Bedarfsgegenstände* である。それは一面においては需要者を取巻く財貨の世界を一層頻繁に交替せしめようとする需要者の衝動から生じ、他面においては革命的な技術によつて需要者が移し入れられている交替への強制状態から起つていのである。

資本主義的企業家は我々の需要対象の不断の交替に旺盛な関心を持つてゐる。それ故彼は我々を我々の意志に反しても新しい需要対象へ移行行くように強制するような沢山の術策を見つけ出した。この種の最もよく知られている術策の一つは流行 *die Mode* であるが、これは今日完全に資本主義的企業家の支配下に陥つていのである。

2、高度資本主義の時代における需要充足の第二の特質は個々の充足行為の加速化と従つて短縮化 *die Beschleunigung und damit Abkürzung des einzelnen Befriedigungsaktes* である。(以下若干省略)

こうした加速化の結果生ずることは同一の短時間において一層多くの欲求が充足され、或は同一の欲求が一層屢々充足されることが出来るということ(時間の多少に差はあつても生起する需要充足が性質上は同じものであると仮定して)である。つまり需要充足の強化 *Intensivierung der Bedarfsebefriedigung* がある。然し需要充足が一層迅速に行われることが出来るためには、生産と輸送が同一の加速化を受けねばならない。

需要充足の領域におけるこうした加速化の傾向の理由には次のものがある。第一にはそれは到る所に拡まつている時間の価値に対する感情であるが、これは今日の人間を迅速性へと追立てていたのであつて、時間は今日の人間にとつては貴重な財貨なのである。だから「人は少しも時間を持つてい

ない」ということさえ言われる。(以下若干省略)第二には資本主義的利害が直接に躁急性へと駆り立ててゐる。即ち消費行為の加速化は資本変動の加速化を意味し、資本変動の加速化は利潤の増加を意味するのである。第三に個人を排列せしめてゐる機構の運行によつて一定の歩行速度が個人に押しつけられる。即ち私が地下鉄道を利用しようとする場合、乗車や下車の際に一定の速度を踏越えることは許されないのである。

3、需要形成が高度資本主義の時期において益々多く持つに至る最後の特質は需要充足の集団化 *die Kollektivisierung der Bedarfsebefriedigung*、即ち従つて需要を集合的に充足せしめようとする前進的傾向である。需要形成の集団化は殆んど凡ての領域において追求せられ得る。(以下若干省略)

需要形成の性質と方法が資本主義社会に特有な諸傾向をもつものとして示されるのと同様に、財貨の性質そのものが又資本主義社会においては独自の特徴を持つてゐる。高度資本主義の時代における財貨の需要を特徴づけているものとしては就中次のものがある。

1、労働手段、即ち従つて他の諸々の財貨の生産に役立つところの財貨に対する増大する需要。

2、労働手段に対する需要の増大というこうした現代の技術に基づく諸理由に加えて更に別の需要の推移から生ずる特殊な理由、即ち粗製品に対する増大する需要が現われる。粗製品、即ち安価な財貨あるいは大量需要必需品はつまりその生産のためには高価な精製品としての労働手段の比較的大なる消費を必要とする。

3、手仕事を排除して機械的な方法に基づいて多く作り出されるという極めて明白な理由からして、我々は次に飲食物や着物や住居の領域における手の込まない財貨に対する需要の増大を認めることが出来る。

我々がこうした需要の推移の諸理由を問題とするならば、十九世紀中に開化する人類の移植民様式が経験したところの、即ち都市への移住とそれの大都市への発展という変化について特に言及せねばならないであろう。こうした社会構成の変化が需要慣習の都市化 *die Urbanisierung der Bedarfssitten*

と呼ぶことの出来る事柄を惹き起したのである。又それと手の込まない財貨の過剰消費とが極めて密接に結びついている。我々の使用財に対する要求は以前とは別種のものとなつており、又使用目的が変るに依じて有用と美に関する価値判断も變つていたのである。

そうした諸々の関係は極めて判然としている。都市人の坐業生活は以前の時代の重々しい含水炭素の多い食物を許さず、その落着かない生活は刺激物を要求し、肉食を必要とする。我々の都市における住居は、我々がその中で「天幕」を張るところの、空虚な貸立方体となつてゐる。家の椅子は家具運搬車の利益のために製作せられてゐる。又同様に着物に対する我々の要求も、我々が良く手入れされた道路と良く温められた部屋に居住し、それ等に温められた鉄道が加わるようになって以来、別種のものとなつてゐる。

4、疑いもなく現代の技術は手の込まない日用品への移行を根本的に促進した。即ち、手の込んだ厄介な財貨を手の込まない財貨によつて押しつけるという丁度今述べた傾向に近似せるものに代用品に対する増大する需要がある。(以下若干省略) 今日我々の財貨の世界における最大の部分が代用品から成立つてゐると言つても過言ではない。

5、然し資本主義経済にとつて恐らく最も重要な財貨需要の新形成における傾向は一樣な財貨に対する増大する需要、即ち需要の一樣化 Uniformierung への傾向である。

我々はこうした重要な現象を直ちにその因果関係において考察し、従つて一樣化の個々の現象をそれを惹き起した原因に従つて整理するならば、それを最も早く参酌することになるであらう。

(a) 一樣の財貨に対する増大する需要は現代の文化、特に経済的發展の結果(随伴現象)である。ここで先ず第一に興味(従つて又需要)の一般的平均化について述べらるべきであるが、これは人間相互間の増大する商業主義によつて生ずるものであり、需要の文明化あるいは脱自然化と呼ばれることの出来るものである。その本質は古い風俗習慣の解消ということにあり、食料品の統一化(局地的や地方的や国民的な料理の廃止)や着物の統一化(

局地的や地方的や国民的な服装の廃止)や住居の統一化(凡ゆる田舎風な多種多様な建築様式の都市的な住宅類型による取代え)に現われている。

需要のこうした一般的平均化の特殊な場合をなしているものにその官僚主義化 Bürokratisierung と呼ばれるものがある。私はそれによつて官吏階級の増大する重要性によつて生み出されてゐる需要の統一化への傾向を指すのであるが、そうした広義の官吏階級には大きな交通機関の従業員も国家や都市の仕事に勤務してゐる労働者なども属してゐるのである。

消費の官僚主義化に似た一つの現象に現代において同様急速に生じつつあるそのプロレタリア化 Proletarisierung があるが、これは購買者としての大なる賃労働者階級の出現によつて生じてゐるのである。

(b) 需要の統一化に役立っている別の原因系列は消費(需要充足)のための組織の増大であるが、これは我々に周知の諸傾向、即ち需要の中央集権化(その担手としての公共の団体や施設の増加)への傾向やその集合化並びに個々の企業の経営範囲の拡大への傾向の結果として現われている。それによつて統一的な需要の大きな中心点が、例えばそうした中心点をなすものが行政官庁であれ、或は公共施設であれ、或は又大企業であれ、形成せられることになるのである。

(c) 今まで考察してきた二つの發展系列は財貨の増大する一樣性を他のいろいろの努力の明確に意図されたものでない随伴現象としてもたらしたのである。然し今や我々はこうした一樣化が少なからざる部分において一樣性への意識的意欲の結果であるという事実を確定しなければならぬ。凡ての前資本主義的文化にとつては未知のものである一樣性へのこうした意欲は、ヨーロッパにおいては、近代国家がその軍隊において紀律「軍服」Uniformität を作り、それに有効な武器(銃砲の口径 Kaliber)を供給しようとする努力において先ず働き出したのである。(私の「戦争と資本主義」における詳論参照)

然しながら先ず十九世紀になつてこれ等の合理的な国家目的の領域の外に植民においても需要形成における一樣性へのそうした意欲が生じたのであ

る。これは就中アングロサクソン人において顕著であるが、この場合においては特に一様性への意欲は着物において形式の非常に広汎な一致をみたので、「制服」ということについて語られることが出来るようになったのである。然し又その他の場所においても、少くともアメリカ合衆国では、一様性への「衝動」が認められ得るのであつて、経営経済学に關する十二冊の書物も、丁度ギブソンの描いた十二人のアメリカ女や十二のジャズバンド楽曲と同様に、何れも互に似ているのである。

然しながら我々の財貨の世界におけるそうした一様性は、若し企業家がそれに最大の関心を懷いて、自からそれを促進するということをしないならば、現実にもられる程までに大きくはならないであろう。真正の企業家の念頭に顕著な未来像として浮んでいるものは常に或る欲求——恐らく一層多くの欲求——を同一形式の対象物によつて充足するということである。（以下若干省略）

その理想は未だ実現されてはいない。然し我々はそれへの途上にあつて、それに向つて迅速に行進している。就中アングロサクソンの、特にアメリカの企業家は最下級の日用品の統一化のための闘争において有効に非常な成果を収めている。食料品や衣服や住居の凡ゆる領域において統一的な類型、定価や品質や包装の一定した所謂「極印附品物」が世間に押しつけられている。我々はここでも又——流行の形成の際におけるのと全く同様に——企業家の利害に完全に從属しているのであつて、我々がどんな形の長靴や帽子や外套を身につけることになるかをそうした企業家の利害が我々に指定するのである。そしてそれは単に極く僅かの見本を選撰することだけを我々に許しているのである。

6、私が高度資本主義の時代における需要の形成について画いた像は、若し私が丁度今述べた傾向に逆行するものではあるが、財貨の世界における多様化 *Vermiengfaltigung* への傾向もあるという事実について一言しよう。もしないならば、不完全なものとなるであろう。そうした傾向は常にいろいろの新しい種類の日用品が現われるという事実によつて、而も又此所彼所にお

いて趣味が違つていて、企業家の影響も趣味の分裂への社会のこうした傾向を抑圧するほど充分強くないという事実によつて生み出されるのである。

## 2、企業家階級

完全なる企業家とは次のようないろいろの性格をもつものを言う。

(a) 発案者 *Erfinder*、即ち技術的な改革の発案者と言うよりは寧ろ生産や輸送や販売の管理上や組織上の新形式の発案者。発案者の企業家はその仕事を発案そのもので終るのではなく、この発案は千倍もの生命ある現実として確立されねばならない。

(b) 発見者 *Entdecker*、即ち企業家はいろいろの新しい販売の可能性の集約的並びに外延的な発見者になるのであるが、外延的な発見者とは企業家がその活動のために空間的に新しい領域を発見する場合にみられるものであり、集約的な発見者とは企業家が既に支配せる領域のうちにいろいろの新しい欲求を発見する場合にみられるものである。

(c) 征服者 *Eroberer*、即ち企業家は彼の邪魔をするような障害を凡て克服する断乎たる決意と力を持たねばならない。然し企業家はまた多くの事を敢行する力を持つている人間という意味においても征服者であらねばならない。企業家は、彼の企業において多額の収益を得るために、全力を注ぐのである。

(d) 組織者 *Organisator*、組織するというのは多くの人間を好都合な効果ある活動が出来るように組合わせることを意味し、又望まれている有用活動が制限されることなしに現われるように人間と事物を配置することを意味する。ところでそれには極めて多様な能力と行為が含まれている。

先ず第一にそうした組織行為をなそうと思う者は人間をその能力において評価し、従つて一定の目的に適した人々を大多数の人々のうちから見つけ出すという素質を持たねばならない。

次に彼はそうした人々を自分の代りに働かせ、従つて又特に（企業範囲が大きな場合には）支配人の仕事全体からその一部分を順次組織的に自か

ら引受ける人々を指導的地位につけるといふ才能を持たねばならない。

今上に触れた任務に關聯して次にそれに劣らず重要な別の任務、即ち凡ての労働者を彼が最大限の能率を果すような正当な地位に置いて、彼をその能力に相應せる最高額の活動をするようにと兎に角努力させることに予め成功した後で、彼がそれを実際に果すように常に激励するという任務がある。

最後に共同の活動に対して結合された諸々の人間集団が質的にも量的にも適当に組立てられて、相互に——そうした何つかの統一体が肝要である場合には——最も良い關係にあるということ、それが最も合目的な經營構成の問題なのであるが、そうした事実に対して配慮することが企業家の責務なのである。

然しながら經營組織というのは單に諸々の個別的な人間集団にとつて実質的に（即ち技術的に）適当な結晶点を巧妙に選択することだけを意味するのではなく、更に地理學上や民族學上や景氣上の特殊性への同様に適切な順応をも意味する。經營構成には單に絶對的に最上のもののみならず、更に——實際上一層重要な形式として——相對的に最上の經營構成もあるわけである。

商人としての機能を営むということ、即ち商人であるということ（職業上の意味においてではなしに、機能上の意味において）は収益ある取引をすることを意味し、一つの共通目的のために、勘定することと商うことという二つの活動を結合することを意味する。それ故取引する人は（a）投機的計算者であると同時に、（b）実務家や商議者や商人でなければならぬのである。

こうした特別な意味において取引を行うということはそれ故商品（株券、請負、公債）の売買のために商議することを意味する。（以下若干省略）凡ての（現代の）「商う」ということの中心となるものは、實際全く確實に何時も口頭で行われなくとも、面と向合つて行われることを必要とする商議なのである。それは又沈黙の形で行われることも出来るが、それは売手が例えば種々の技巧によつて自分の一般人に對し彼の商品のいろいろの利点を、一般人が商品を是非彼の所で買わねばならないと思う程に、納得させるといふ

方法によるのであるが、広告はどうした技巧なのである。

買手（あるいは売手）に売買契約の締結における有利な立場について確信させるといふことが何時も重要である。売手の理想は、彼が正しく推挙した商品を買取ることが一番大事であると全住民が考えるようになった場合に、達成せられる。（以下若干省略）

興味を刺戟し、信頼を得、購買欲を喚起すること、こうした事柄の極点に成功せる商人の活動が現われるのである。彼が何によつてそれを達成するかということはどうでもよいことである。それが一つも外的な強制手段ではなくして、専ら内的な強制手段であるということ、又相手方が意志に反してではなしに、自分の決心から契約に承諾を与えるということと充分である。商人の影響は暗示によつて行われるのでなければならぬ。然し内的な強制手段にも沢山のものがある。それを枚挙することはここではその必要がないであらう。

凡ての人が資本主義的企業家の諸機能を果すことが出来ないことは明白なところである。然し企業家はそうした才能をもつていなければならぬ。それ故我々は人間のうちのそうした特種な人々を「企業家的性質の人々」*Unternehmernaturen* と呼ぶことができるであらう。

企業家的性質の人達とは、彼等が資本主義的經濟の創始者として登場した時には、物質的な諸価値、即ち人間の現世の仕事における努力に對する強い感覺を所有していたところの、顕著な知性的意志的な才能と強い活力を有する人達なのであり、我々の国内で良く言うところの「実践的にして実行力ある」人達であり、そして彼等は丁度凡ての手工業的自足性と享樂的な安樂を好まざるのと全く同様に、宗教的人間や藝術家の凡ゆる瞑想的本質を嫌うのである。

種々の民族も又同一民族内における種々の社会集団も色々と多くの又高い才能をもつた企業家類型を示すということは有り得ることである。

私はこうした問題を「近代資本主義」の第一卷八三六頁以下と「ブルジョア階級」の二五三頁以下と二六六頁以下と「ユダヤ人と經濟生活」において

追求した。私は読者にそれ等の詳論を参照することを願わねばならない。

企業家階級のあれこれの側面が現われることによつて今や高度資本主義の時代がたつうちに一定の企業家の諸類型 *Unternehmertypen* が作り出されているが、私はそれ等について専門家と商人と金融資本家という三つのものを区別する。

(1) 専門家 *der Fachmann* とは、彼の生産品の配慮をしてそれに成功を収めさせようと望むところの、そうした彼の生産品の必要から生ずる。彼は専門に拘束されている。こうした被拘束性は発案者の企業家（これは企業家としての才能を併せ持つていることによつて純粋なる発明家とは十分に区別されるべきである）において特に明瞭に現われている。発案者の企業家は、彼の発案を出来るだけ大きな範囲において実現する（そして勿論又販売することによつて、彼の発案に生命を得させようとする。専門家と彼の努力の関心の中心にあるものは事業経営の組織ということである。彼の主要目標はいろいろの適切な労働力の調達と合目的な使用に向けられていて、三つの市場のうちでは労働市場が特に彼に関係のあるものである。彼はその活動全体において一次元的、即ち穿孔的である。彼は競争の三つの異なる可能性のうちでは能率の競争に心を向ける。人はこうした類型を産業の指揮者 *Captain of Industry* と名づけてきた。

(2) 商人 *der Kaufmann* は市場の必要から出発して、彼が最も売行がよいと考える生産品の製作を決意する。彼は所謂「未来を見抜く眼」（ピンネル）を持つていて、それによつて予想される必要物を先見し、次にそれを巧妙なる宣伝によつて仕上げる。理想的な商人とはいろいろの欲望を作り上げて、次にその充足手段を生産する商人なのである。労働市場ではなくして、商品市場が彼の活動の主戦場であり、事業組織ではなくして、販売組織が彼の最後の創造物である。一次元的な専門家と対比すれば、商人は二次元的な平面をもち、広がりをもつたものである。彼の性向と能力に相応しているものは暗示競争である。英語ではそうした人間を実務家 *Business man* と名付けている。

石瀬訳・ゾンバルトの「資本主義」論

(3) 金融資本家 *der Finanzmann* は資本の必要から生じ、主として取引所上の技術的処置による資本の調達と資本の結合とが彼の主要なる仕事である。それ故彼は三つの市場のうちで特に資本市場を支配し、会社の創設や会社の合併やコンツェルンの形成に力を尽す。彼は特に好んで企業の建設に従事するが、彼は構成的に活動し、三次元的である。彼は勢力競争を好む。アングロサクソン人の諸国においては、特に今日アメリカ合衆国においては、そうした人は株式会社会社の金融資本家 *Corporation financier* と呼ばれている。

こうした諸類型が純粋に現われるのは極めて稀な場合であつて、寧ろ大抵は混和して現われるものであることを尚更に明確に示す必要はないであろう。しかも極めて屢々専門家と商人との混合形や商人と金融資本家との混合形が見出される。ある意味においてはそうした三つの類型は今ここに選んだ順序で時間的にも継続している。純粋なる専門家は高度資本主義の時期よりも初期資本主義の時期により多く所属し、高度資本主義の時期においては寧ろ他の二つの類型が常に一層頻繁に現われている。金融資本家は、経済生活における集中化の運動が伸張する程、益々一層重要となる。

同じく自明的な事であるが、経済生活の種々なる領域は企業家の機能に対し色々異なる要求をなし、それ故又別々の類型に対しても異なる関与の機会を与えている。精密機械工学の領域においては専門家が、大衆品生産や百貨店経営においては商人が、鉄道線路の設立には金融資本家が寧ろ活動すべき機会をもつことになるであらう。

然し凡ゆる現代の企業家階級のうちには今や、我々が次のように解釈することが出来るような、一つの新しい人間類型が形成されている。

(1) 巧妙な淘汰過程によつてその素質上知的な点においても又意志的な点においても経済的勢力の最高能率を發展させる使命を有するような人々が支配するようになつている。

(a) 企業家階級の民主化は——多数の人口のうちにおける企業家的性質の人々のある与えられたパーセンテージにおいて——企業家的意志と企業家

(14)

的素質をもつた人々が、企業家の機能が尚貨幣の所有という条件に結びついていたような社会におけるよりも、より多く活動するようになっていよう事実を惹き起さざるを得なかつた。

(b) 資本主義の重心の人種の推移によつて資本主義は益々一層ゲルマン人やユダヤ人の業務となつてゐるが、それによつて一層力強い資本家としての才能を包含している諸民族が明かに前面に出て来てゐるのであつて、ゲルマン人種は資本主義精神の発展に対して企業心に富める進取性、「フアウスト的なもの」、強靱な忍耐力、構成的建築的な才能をもち、又ユダヤ人種は大なる活動性、投機上の鋭敏性、著しい勘定性、他人の内的生活を理解する能力、進歩欲をもたらしつゝゐる。

(c) 植民地の人々は勢力淘汰を行つて、その本質上新しいものを求める努力に適つてゐる。

(2) 我々が同様に既に確立する機会をもつたところの、新しい経済的指導者の職務範囲を新しく規定しなしたということは今や上に示した仕方を選抜された企業家達の内部において各人が夫々最高度の能率を現わすことが出来るような地位に達することを得しめたのである。

(a) 凡ての副次的職務を引き離すことによつて企業家活動を専心的に世話することが可能となり、「純粹なる」企業家が活動を始める。

(b) いろいろの職務を専門化することによつていろいろの特殊の才能を持つた人々が諸々の特殊の活動をするようになり、習熟と熟通は能率を高める。

(c) 管理者一同の間における協力は個々人の能率を促進し、又全体の能率をも高める。

(3) 新しい型の人々において世界観上の新しい方向決定が成就されているが、これが彼等をして資本主義経済の枠のなかで最高の諸業績を実現するに適するものたらしめてゐるのである。今日未だ——形式上はユダヤ教やキリスト教の「信心深い」態度を持ち続けている企業家圈においてさえも——企業家活動の古い信仰による何らかの本質的な影響を認めるといふことは笑

うべきことである。信仰は全く日曜日の用事となつてしまつてゐる。日常生活は寧ろ徹頭徹尾新しい精神的態度によつて規定されてゐる。生活態度が純粹に自然的衝動的に作られてゐない所では——私はそれが今日の常例となつてゐると認めた——それ故營利欲や權力欲や活動欲が行為を規定せずして、寧ろ何らかの規範的超個人的な規定が根を下ろしてゐる所では、資本主義的企業家の態度に影響を及ぼすものは主として次に述べるいろいろの理念なのである。

(a) 先ず第一のものは進歩を信ずること *der Glaube an den Fortschritt*、即ち経済的伸張の人道主義的使命を信ずることであるが、これは恐らくその上に公益に対する奉仕をなすという觀念にまでも成長するであらう。こうした最も重要な宗教の代用物から生ずるものは (イ) 成功への意志、即ち大きな経済的成果を得ようと努める努力であるが、これは典型的にはトラストの有力者から店の給仕にいたるまでの凡ゆるアメリカ人に特有な精神的調子である。(ロ) 次に揺がし難い楽観があり、(ハ) 更には義務意識があるが、然しこれは次に述べるような現実に存在している義務の概念から生ずるのではないもの——これは屢々見られる場合なのである——である。

(b) 次に近代の特殊なブルジョア資本主義的な義務概念 *Pflichtbewusstsein* の形成がある。これは元来確かに宗教的な基礎をもつていたのであるが (實際この点については近代の職業倫理と試煉の信仰の間に關聯が存している)、然し久しい以前から成上り者の苦悩と良心を熬らす努力から作られた基礎を土台としてゐるのである。こうした基礎の本質は能率の価値の強調や労働そのものの過大評価や労働を人生の唯一の源泉と認めることにある。儲は、厳しい労働に基づく限りにおいてのみ、儲と看做される。

「労働は市民の誇りにして、

祈禱は骨折りに価するものなり」

こうした義務論において宣告されてゐるものは全くヨーロッパ的アメリカ的な、一層正確に言えば北歐的な理想であり、それは近代資本主義がその根源を市民化の過程にも最も早く入り得た北歐的人種のうちに持つてゐるという

我々が既に評価した事実と一致するのである。

(c) さて然しながら近代的经济人の行為が、カントとは全く違つた仕方においてではあるが、單に義務意識によつてのみ動かされるものではなくして、尚又——奇異に聞えるかも知れぬが——愛 *Liebe* によつても動かされるのである。勿論それは愛の特異な変種、即ち自分の仕事に対する愛 *Liebe zu seinem Geschäft* を指すのである。我々はこうした精神的態度の倒錯現象を心理学的に説明しようとするならば、企業家の精神においては過剰な労働と特に、それ以外の何物にも時間を残して置かないような、取引上の事件への過度の没頭のために、その他の凡ての側面が萎縮して、自然、芸術、文学、国家、友人、家族といったものが最早何ら魅力を与えることが出来ず、その結果彼は彼を守つてくれ、温めてくれ、活気づけてくれる数字の世界から出るや否や空虚と寂寥という耐え難い感情に襲われるようになるという事実をもつてせねばならないであろう。それに反してこうした取引の世界においては彼は、彼を生気づけ、鼓舞し、幸福にする一切のものを見出し、それを彼の眞の故郷と感じ、或は新しい力を汲みとる青春の泉と感じ、更には渴せる者を新しく活気づけるところの泉と感ずる。彼がこうした世界に遂には自分の愛を捧げるようになるということは少しも不思議ではない。近代的经济人のうちに演ぜられているこうした過程によつて他の如何なるものによつても放出されることの出来ない豊富な生活力が経済生活に供給せられることは疑う余地がない。経済組織が唯單に義務意識から生ずる不承不承者の意志によつてのみ動かされるのではなくして、それにおいては近代人が未だその能力をもつている全き愛がその実り多い仕事を果しているということは資本主義制度の発展にとつて測り知れない意義をもつてゐるのである。

### 3、賃労働者階級

賃労働者階級は資本主義経済の一つの必然的要素をなしてゐて、資本主義経済は賃労働者なくしては存立することが出来ず、又賃労働者階級を増大することなしには伸張することが出来ない。然しながら賃労働者階級はそのも

のとしては何ら(経済的)階級を形成するものではない。と言うのは、それは思惟上必然的に一定の経済組織に関心をもつものではなく、社会主義に適合せしめられた賃労働者もあれば、資本主義に適合せしめられた賃労働者もあるからである。

賃労働者階級は非常に分化してゐる。多種多様のものが極めて異なる観点の下に生ずるが、そうした分化の原因となる最も重要な特徴には次のものがある。(1) 年令と性、即ち青少年、大人、男子、婦人、(2) 人種、即ち白人や凡ゆる色の有色人、(3) 種々様々な国民性、(4) いろいろの職業部門、即ち農業、工業、商業、運送業、私的奉公人等、(5) 経営における階級、即ち使用人、労働者、手伝人、(6) 仕事振り、即ち熟練者、半熟練者、無学者、機械職工、手工労働者、困難な仕事、楽な仕事等。

賃労働者階級を言い表わすのに「プロレタリアート」という言葉も使われるが、これは何つもの意味を持つてゐる。この概念についてはこの社会学辞典の他の場所で詳細に論ぜられてゐるので、ここで更にそれについて述べる必要はないであろう。

参考文献(この部分省略)